

ピクター和フュージョン・シリーズ第2弾
Contemporary Jazz Magazine

jazz life 10

2017
OCTOBER

特集:トランペット・スケッチズ

COVER STORY

山崎千裕

新作『Sweet Thing』と愛器を語る

注目のトランペット試奏

ヤマハ、バッカ、BSC、キャノンボール

Z EXPRESS BIGBAND

エリックミヤシロ／石井真／赤塚謙一
古屋ひろこ／マイク・ザッチャーナック

ヤマノ・ビッグバンド出場者

使用トランペット・モデル全リスト

トランペット・ショップ紹介

都内の専門ショップ・ガイド

ジャズ100年
モダン・ジャズ再入門
アート・ペッパー
「ザ・マン・アイ・ラヴ」研究

SPECIAL

渡辺香津美

ソニー・フラッグシップ
ウォークマン&
ヘッドホンを体験する

SCORE

ザ・マン・アイ・ラヴ

アート・ペッパー

ユーアー・ア・ウィーヴァー

オブ・ドリームス

ジョン・コルトレーン&
ウイントン・ケリー

アローン・トゥゲザー

ジェフリー・キーラー(ジャズ・ドリル)

オール・オブ・ユー

トランペット・ソロ譜
(ジャズ・トランペット入門)

CLOSE UP

上原ひろみ

マイク・スター

アヴィシャイ・コーエン

サイモン・フィリップス

ケイコ・リー

大野雄二

JAZZ FESTIVAL & JAZZ EVENT

スウェーデン・ジャズ・フェスティヴァル
ヤマノ・ビッグバンド・ジャズ・コンテスト
ジャズ・ギター・コンテスト 2017
UENO JAZZ INN '17

LIVE, INTERVIEW
& WORKSHOP

平戸祐介

伊藤志宏

西藤ヒロノブ

マリア・シュナイダー

ジャズ・トライアングル

セリム・スライヴ・エレメンツ

ラーゲ・ルンド&プリン・ロバーツ

ニューヨーク・スタンダーズ・カルテット

Trumpet Sketches



YstadSweden JazzFestival

text by Hiroki Sugita
取材・文: 杉田宏樹
協力: スウェーデン大使館

スウェーデンを代表するジャズ・ピアニスト、ヤン・ラングレンが芸術監督を務めるジャズ祭として知られるスウェーデン・ジャズ・フェスティバル。今年で開催8年目を迎える同フェスを、北欧ジャズにも造詣が深いジャズ・ジャーナリストの杉田宏樹がリポートする。



スウェーデンの国民的歌手モニカ・ゼタールンドへのトリビュート・プログラム

スウェーデン南端の都市で開催される《イースタッド・スウェーデン・ジャズ・フェスティバル》。2000年の第1回は小規模で開催し、年々拡大しながら第8回を迎えた今年は、昨年よりも1日多い6日間(8月1日~6日)のスケジュールが組まれた。その発展の立役者を演じたのが洞国出身のピアニストで、同祭の芸術監督を務めるヤン・ラングレンである。自身のレコーディング活動で欧米での太いパイプを築いてきた実績が、小都市を同国のジャズ・メッカに押し上げるまでに至っており、近年のラインアップを見ればその辣腕ぶりが納得できるはずだ。

80~400席の小規模な11会場は、一部を除いて時間帯が重ならないようにスケジュールが組まれているので、回遊しながら漏れなく鑑賞ができることも特色。今年追加された1日とは初日のオープニング・コンサートで、同祭では初の会場となる1500席のスポーツ・アリーナだった。2005年に逝去したスウェーデンの国民的歌手へのトリビュート・プログラム「モニカ・Z~フォーエヴァー・アンド・エヴァー」は、ベル・エクダール(ds) & カール・バッゲ(p)・ビッグバンドに、ハンナ・スヴェンソン、ヴェテランのトニー・コルバーグ

Jerry Bergonzi & Tim Hagans
ジェリー・バーゴンジ(ts) & ティム・ヘイガーン(tp)
photo by Harri Paavolainen



名ピアニスト、ヤン・ラングレンが芸術監督を務めるジャズ祭

イースタッド・スウェーデン・ジャズ・フェスティバル 2017 ジョシュア・レッドマンの新プロジェクト、ひろみ&エドマール、ディメオラも登場!



Joshua Redman "Still Dreaming"
ジョシュア・レッドマン(sax) "スタイル・ドリーミング" feat. ロン・マイ尔斯(tp)、スコット・コリー(b) & ブライアン・ブレイド(ds)
photo by Markus Hagersten

らの歌手が加わり、超満員の観客の笑いを誘う巧みなMC氏の話術も手伝って、次々とプログラムが進行。予定時間を大幅に超えた3時間半のステージは、モニカ・ゼタールンドが死後12年が経った今もなお愛され続けていることを実感した。

唯一のコンサート・ホールで同市のシンボル的な存在であるイースタッド劇場を、本祭のメイン会場として再生したい、とのラングレンの思いはブッキングに反映されていて、4日間の最終ステージを含む11公演を同劇場に設定。

ジョシュア・レッドマンの新プロジェクト、スタイル・ドリーミング

興味深いアーティストが多い中、個人的に最も注目したのが、ジョシュア・レッドマン(ts) "スタイル・ドリーミング" だった。ジョシュアの父デューイ・レッドマン(ts) らオネット・コールマン(as)・グループの出身者4人が、70~80年代に活動したオールド・アンド・ニュー・ドリームス(OAND)の遺産継承と発展をバンド・コンセプトにしたクアルテット。まだ来日していないオールスターズだ。ジョシュアは2014年に続く、同祭へ2度目の出演。プログラムはオーネット、OANDのデューイ、ドン・チャーリー(cor)とチャーリー・ハイデン(b)、現バンド・メンバーのスコット・コリー(b)の楽曲で構成。ジョシュアは

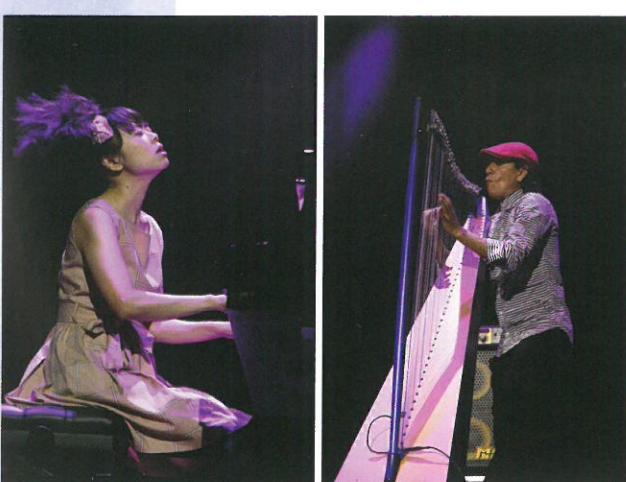
全身をよじらせながら吹きまくる「オープン・オア・クローズ」や、マルチフォニック奏法の無伴奏テナーで観客の耳目を引き付けた「ナフティ」など、全編でリーダーシップを發揮したのが印象強い。ビル・フリゼール(g)との共演歴があるロン・マイ尔斯(cor)は、どことなくチェリーを連想させる風貌で、クールなたたずまいを貫く。バンドの飛び道具的な役割を演じたのは、ブライアン・ブレイド(ds)だった。リズム・キーパーの概念を覆したスタイルを手加減することなく全開に。「イツ・ノット・ザ・セイム」ではジョシュアを煽りながら、破裂しそうな勢いでバスドラムをキック。OANDのエド・ブラックウェル(ds)とはかなり異なるタイプのブレイドを起用したジョシュアの真意は、バンドの新しさと独自性にあったのではないか。アンコールの「ブロードウェイ・ブルース」ではジョシュアとマイ尔斯が、高音域ユニゾンの限界にチャレンジする場面を現出。まだアルバムを発表していないプロジェクトのデビュー作に期待が高まった。

上原ひろみ&エドマール・カスタネーダ、圧巻のデュオ・パフォーマンス

5日目のトリオを務めた上原ひろみ(p) & エドマール・カスタネーダ(harp)を、9月下旬の日本公演に先立って鑑賞。上原はチック・コリア(p)、

Jan Landgren meets Nils Lundgren

ヤン・ラングレン(p) & ニルス・ラングレン(tb,vo)
photo by Markus Hagersten



Hiromi & Edmar Castaneda
上原ひろみ(p) & エドマール・カスタネーダ(harp)
photo by Markus Hagersten

矢野顕子(p,vo)、熊谷和徳(tap)をデュオ・パートナーにしてきたが、コロンビアン・ハープ奏者は初めてであり、我々には馴染みがない楽器はデビュー作『ライヴ・イン・モントリオール』を聞いても、わからない部分が残っていた。同作を基本としたプログラムかと思っていたところ、アルバム未収録のカスタネーダ作曲「エントレ・クエダス」でスタート。多数のレバーを絶え間なく操作しながら主旋律とベース・ラインを奏でるカスタネーダは、従来のハープ奏者のイメージを打ち破つて、同じ弦楽器であるギタリストに近い感覚の持ち主なのだと納得。『ジャコ・バストリアスのグループ』をハープで表現したいと思って作曲した』という「フォー・ジャコ」は、カスタネーダがベースに似た音とハーモニクスでジャコをオマージュ。攻撃的な楽器特性が浮き彫りになった。

圧巻だったのは4部構成の組曲『ジ・エレメンツ』。上原が昨年の『モントリオール・ジャズ祭』でカスタネーダと出会ってから書いた同曲について、自分たちのスタイルに合う楽曲がないので作曲した、と説明して観客の笑いを誘った。過去作でも組曲を発表してきた上原が、ここでは音のキャッチボール、ユニゾン、楽器のボディをバーカッションに見立てたブレイドを展開しながら、最終章の『ファイア』で秘技の応酬に至る。アンコールの『リベルタンゴ』は激しい演奏とラストのふわりとした着地のギャップが大受けとなった。視覚的な情報が伴うからこそ、楽しさが倍増する音楽である。

"Guest of Honor"として出演したアル・ディメオラ貴重のステージ

今年は『エレガント・ジブシー』40周年記念ツアーが話題のアル・ディメオラは、本祭の出演者で唯一与えられる『ゲスト・オブ・オナー(Guest of Honor)』を戴冠。イタリア人ペオ・アルフォンシ

Victoria Tolstoy Quartet
ヴィクトリア・トルストイ(vo) クアルテット
photo by Harri Paavolainen



Al Di Meola & Peo Alfonsi
アル・ディメオラ(g/写真右) & ペオ・アルフォンシ(g)
photo by Markus Hagersten

と登場し、「ミュージック・オブ・ディメオラ、ピアソラ & レノン=マッカートニー」と題してギター・デュオを聴かせた。「ミステリオ」「マワジン」「アドゥール」といった自作曲でディメオラの左手の動きを追っていると、ジャズ、フュージョン、ロックのどれにも分類できない独特なスタイルであることを今さらのように納得させられ、それを観るだけでも飽きない面白さを感じる。

職人肌の風貌を持つアルフォンシは、サポート役に徹するわけではなく、交代でリードも取って優れたパートナーであることを証明。5年前の欧洲ツアーや中にアビー・ロード・スタジオで録音した『オール・ユア・ライフ』からの『ビコーズ』は、フラメンコ・ギターの装飾音をつけて情熱的な仕上がりに。アンコールは『地中海の舞踏』で期待通りに痛快なフィニッシュに至った。

国籍、性別、ジャンルを問わず、世界中からジャズ・アーティスト達が集結

欧洲と所縁の深い米国人のブッキングも、ラングレンのアドヴァンテージの表れであり、地元の観客のニーズに応えるためのアイディアだ。欧洲レベルからのリリース作が豊富なジェリー・バーガンジ(ts)と、70~80年代にスウェーデンに住んだティム・ヘイガーン(tp)が、デンマーク人のリズム・セクションと組んだクインテットはその好例。オリジナル曲の『A.M. タイム』『シングス・ハブン・イン・ア・コンヴァーティブル』『ドリーム・チャイルド』は、経験豊富なフロントひとりを生かしたストレートでモダルなジャズの魅力に溢れたサウンド。アンダーシュ・モーゲンセン(ds)のパワフルな演奏も特筆したい。

かつて“スコットランドの貴公子”としてブルーノートにリーダー作を残したトニー・スミス(ts)は、音楽監督を務めるスコティッシュ・ナショナル・ジャズ・オーケストラに同郷のエディ・リー

ー(vo)をフィーチャーした大編成でスウェーデン初出演。「ソングス・オブ・スコットランド」の表題は、エディの2003年作『ソングス・オブ・ロバート・バーンズ』からの楽曲を中心としたプログラムの意味だった。ダイナミックなビッグバンド自体の魅力と、女優を思わせるエディの表現力豊かな歌唱が絶妙にマッチ。

ヤン・ラングレン(Lundgren)の発音は正しくは“ルングレン”は、2組で劇場に出演。「ラングレン・ミーツ・ラングレン」は、ニルス・ラングレン(tb,vo)とのデュオで、共に独ACTの所属アーティストによる初企画だ。実力者のふたりはエンタメ性溢れるニルスと音楽に対して真摯なヤンのキャラクターの違いとともに、相性の良さも浮き彫りに。アンコールの『ディア・オールド・ストックホルム』にヤンがソロで別の古謡を繋げて笑いを誘い、最後にニルスがマルチフォニックでオチをつけた場面は見事だった。今年『ポツダム広場(Potsdamer Platz)』を発表した、ラングレン率いるクアルテットは、北欧オールスターと呼べるメンバーで、ヴェテラン・アルト奏者ユッカ・ペルコが收穫となった。

ストリングスをバックに生誕100年のエラ・フィッツジエラルドをトリビュートしたデッポラ・ブラウン(vo)、近年急速に評価を高めるスウェーデンのアンソロジー・ソーフィ・ソーダクヴィスト(cond)・オーケストラ、同國のトップ・ヴォーカリストの貴婦を感じさせたヴィクトリア・トルストイ、タブラ・アコディオン・ハープを含む全員女性のセブテットで個性を発揮したニコール・ヨハントゲン(as,ss)、ソロ・アクトでの進化形を示したイーロ・ランタラ(p)、ヤコブ・フィッシャー(g)との共演でも現地の人々に日本人ミュージシャンの存在を知らしめた佐藤洋祐(as)など、充実のプログラムが満載。まだまだ発展する可能性を秘めたジャズ祭を今後もウォッチし続けていきたい。■

Iiro Rantala "Solo Piano"
イーロ・ランタラ(p) solo
photo by Harri Paavolainen

